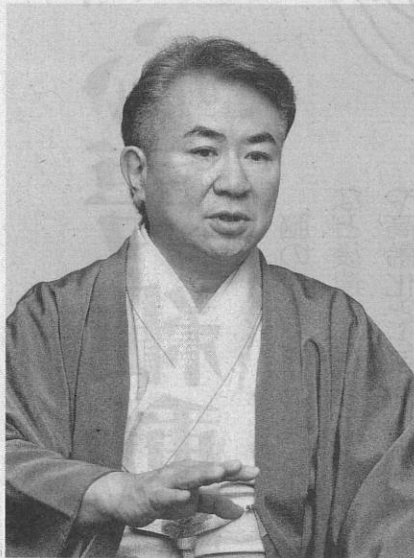


ご感想、情報は・Eメール life@sankei.co.jp
・FAX 03・3270・2424

父の 教え

遠州茶道宗家13世家元 小堀宗実さん



「代々の家元の中でも、父は抜きん出ている人に入る。簡単には超えられないと覚悟している」と話す小堀宗実さん (大西史朗撮影)

江戸初期の大名茶人、小堀遠州を流祖とする遠州流茶道の家元を、父の小堀宗慶さんから継承した宗実さん(57)。遠州は徳川將軍家の茶道指南役で、建築や作庭でも名を残したが、「遠州流の重みより父の重みをずっと感じていました」と話す。

宗慶さんも建築から造園、伝統工芸の分野まで指導力を発揮して「現代の遠州」といわれた茶道界のリーダー。「父は『遠州さんの後を継ぐ

んですよ』と言われ、厳しく育てられました。自分を常に苦しめる遠州はどついう人かと思つて研究したそうです。遠州公を理解し、流祖のお茶を正しく世の中に広めることが大事と考え、全国に支部組織をつくりました」シベリア抑留の過酷な体験

メッセージ

何を聞いてもまず、「お茶を一服」という言葉を大切に生きています。一服いつでも差し上げられる状態にしています。

楽しんで生きがいになるお茶

をした宗慶さんが宗実さんに勧めたのは、大学卒業後1年間の禅寺での修行。学生気分を抜いて家に入るための、けじめだった。宗慶さんから教わったのは「お茶を一服」という考え方だ。いつも湯を沸かして、突然の客でも「一服どうぞ」と迎える心を持つという遠州の教えがあり、宗慶さんも何を聞いてもまず一服の気持ちがあった。



小堀宗慶さん(右)と宗実さん(左)平成16年、東京都新宿区の遠州茶道宗家研修道場 (遠州茶道宗家提供)

「毎日お茶をいたなぎ、いろんな方にお茶を差し上げる。その姿を見ていたら、自分も動いていた。お茶会に最も来てもらいたいお客さまは父でした」。宗慶さんを客として迎えたとき、宗慶さんが夏に使った道具を冬に使用したり、魚料理を盛る器を違う用途に使用したりすると、宗慶さんが「面白い使い方をしたね」。その一言が最大の喜びだった。「こう使ったら父はどう言うかと心の中で思っている。そこに気づいてくれたとき、目的を達する。感性が同じだ」と思ったときはうれしい」と振り返る。

茶道は戦後の女子教育に取り入れられて広まった一方、財界人ら男性は高度成長期に遠のいていった。それを残念に思っていた宗慶さんは、男性にもお茶の奥深さを知ってもらおうと、総合的に楽しむお茶を目指していたという。

茶道は日本の文化を網羅し、客も参加して料理を食べ、何百年の時を経た器を使う。行事を通して季節感を知ることができる。宗実さんは海外で交流茶会を開くなど茶道を通じた文化交流に尽力。「遠州流茶道こども塾」を各地で開催し、「楽しんで学んで、生きがいになるお茶を次世代に伝えたい」と、青少年育成にも力を入れている。(寺田理恵)